

- 日 時：2019年11月3日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「忘れることなく、心に覚え続ける人々」
- 聖 書：旧約 ヨブ記 19：25－27（旧 p800）
新約 コリントの信徒への手紙二 4：16－18（新 p329）
- 讃美歌：385「花彩る春を」504「主よ、み手もて」

お早うございます。

今日は永眠者記念礼拝です。

永眠者記念礼拝は、1年52回ある主日礼拝の日でも、私にとっては特別な思いがあります。それは、単に故人を偲ぶだけではありません。前に飾られた遺影のお一人おひとり、あるいは写真はないけれど、皆さんそれぞれが心に残る方々の歩み、その歩みの、他に決して代えることの出来ない人生の重みを覚えるからです。私も、いつの日か必ずこのように記念される日が来ることを思います。その時に、決して軽く思われたいとは思いません。出来得る限り、深く心に覚えて欲しいと思うのです。

私が初めて人の死と向き合ったのは、満6歳の11月6日、土曜日でした。65年を経た今でも、その日の出来事は、日時も曜日も私の脳裏から消え去ることはありません。

その知らせを聞いたのは、姉二人と一緒に母から言われてお昼のおかずを買いにお肉屋さんに行った時でした。誰かが私たちに妹の事故を知らせに来たのでしょうか、胸騒ぎを覚えながら家に戻りました。そして、待っていると、トラックの荷台から父が妹を抱いて降りて来ました。私たちが通っていた教会の門の前で、妹は交通事故に遭ったのです。即死でした。妹は満5歳でした。

小さな棺に納められた妹を見ながら、私は泣き続けたのを覚えています。自分でもこれだけの涙が出て来ることが不思議に思えたほどでした。

私の人生で、あと一度、涙が溢れ続けた死があります。母の死でした。葬儀の挨拶に立った私でしたが、涙が止まらなかったのを覚えています。

死は、なぜそれほどまでに私たちに悲しみを呼び起こすのでしょうか。

それは、改めて言うまでもなく、別れであるからです。

しかも、決して再び会うことのない別れであるからです。

愛する者との別れ。

二度と会うことの許されない別れ。

言葉を交わすことも、手を挙げて挨拶することも、微笑み交わすことも、二度と出来ない別離であるからです。

死は、私たちから愛する者を奪います。そして、耐え難い痛み、悲しみ、苦しみ、淋しさ

を与えます。

しかし、このような人間にとって絶対的とも思われる死に対し、ヨブ記の著者は次のように記すのです。

25：わたしは知っている

わたしを贖う方は生きておられ

ついには塵の上にたたれるであろう。

26：この皮膚が損なわれようとも

この身をもって

わたしは神を仰ぎ見るであろう。

27：このわたしが仰ぎ見る

ほかならぬこの目で見ると。

腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る。

ヨブ記の著者の全身全霊を傾けた信仰告白です。

人間は土の塵から神によって造られ、神によって命が与えられ、又土の塵に返る。

しかし、この肉体は朽ちても、私たちの霊は生き、終わりの日に、神の国で神と会い見るとの確信です。

そして、このヨブの言葉は、パウロの言葉とも響き合うのです。

即ち、

16：だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。

17：わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。

18：わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

来るべき神の国に対するパウロの確信です。

16節の「外なる人」とは、生まれながらの人間、土の器、朽ちて滅び行く者であるのに対し、「内なる人」は、キリストに出会い水と霊とによって洗礼を受け、新しく生まれ変わった者です。「内なる人」に約束されているものこそ、神の国であるのです。

キリスト教の教えの中心的テーマは、人は人生をいかに生きるかです。

そして、その根底には、生と死の問題が横たわっています。

自分の生をどのように考え、死をどのように見つめるかと言うことです。

私たちキリスト者にとって、死は全ての終わりを意味するものではありません。

死は越えられるものであり、死を越えて神の国があることを知っています。

死を越えてと言うより、死を滅ぼして、神の国に招き入れられるのです。

この肉体は朽ち、滅び去って行きます。しかし、私たちは霊と肉とから成り立っていて、死が支配出来るのは肉、即ち「外なる人」であり、「内なる人」は、ただ神にのみ服従するのです。

肉体だけではなく霊的な存在でもある私たちについて、イエス様は、当時のユダヤの最高法院の議員であるニコデモとの対話の中で次のように言っています。

ヨハネによる福音書第3章1節から15節、新共同訳聖書167頁上の段です。

- 1：さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。
- 2：ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」
- 3：イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」
- 4：ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」
- 5：イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」
- 6：肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。
- 7：『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。
- 8：風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」
- 9：するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。
- 10：イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。」
- 11：はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。
- 12：わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。
- 13：天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。
- 14：そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

15：それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

ニコデモは、イエス様が語られた言葉を理解出来ませんでした。しかし、彼は後にイエス様の良き理解者となり、十字架で殺されたイエス様の遺体を引き取れることを申し出たアリマタヤ出身のヨセフのもとに香料を携えて訪れ、彼と一緒に遺体を亜麻布で包み、墓に葬ります。

ニコデモとの対話で明らかのように、人は霊と肉とによって成り立っています。そして、神から遣わされた聖霊の導きによって、自らの罪を悔い改め、主イエス・キリストを神の子と信じ、告白する者に、神様は永遠の命、即ち神の国を約束されました。

それだけではありません。たとえ、この地上の生涯において神様を知り得なかった者であっても、信じる者の執り成しの祈りによって、神の国を約束して下さるのです。

永眠者を偲ぶこの日、私たちは悲しみを越えて、愛する者と神の国で再び会い見える時が訪れることを信じ、希望をもって与えられた人生を歩み進む者になりたいと思います。

祈りましょう。